

幼稚園において適応に困難を示す唇顎口蓋裂児の支援方法の検討

大湊 麗

I 問題

口唇裂口蓋裂についての事例研究は多く報告されているが、口唇裂口蓋裂という疾患や障害そのものに対するアプローチが中心となり、教育的支援についての研究は少ない。口唇裂口蓋裂児は言語を用いた対人相互作用に問題が生じやすいことが指摘されており、言語獲得および表出のための援助だけでなく言語を用いた対人関係や社会性を育むための援助が必要である（広瀬，1999）。言語管理において、幼稚園など集団生活の場でのコミュニケーション行動について情報を得て問題があれば対処するなど、患児の言語衛生上重要な指導である（磯野，2001）。また、言語障害の指導を行うことだけでなく、常に子ども全体を見つめ、全人的な発達を促すことを視野に入れた指導を行うことは、学校において言語障害教育が行われる意義を示すものである（藤井，1998）。子どもが有している困難を総合的に検討して支援を行っていく必要がある。

II 目的

口唇裂口蓋裂に伴う構音障害と幼稚園における適応上の困難を示している事例において、支援方法を検討する。

III 方法

1 対象児について

口唇裂口蓋裂に伴う構音障害を主訴として、本大学特別支援教育実践研究センターを訪れた両側性唇顎口蓋裂女児（研究開始時4歳0か月）。

構音についてはほとんどの子音が一貫した声門破裂音であり、会話の明瞭度が低く、聞き慣れない場合は了解不能である。幼稚園において幼稚園教諭や他児とかかわりをもつことが難しく、幼稚園において他児と話さない、遊ばないなどの問題が大きくなっており、構音指導だけでは対象児のニーズに対応できないことが明らかになった。

したがって、本研究の対象児においては、本大学特別支援教育実践研究センターにおける構音指導と幼稚園におけるコミュニケーション支援を同時に進めていくことが必要であると判断した。

2 手続き

1) 本大学特別支援教育実践研究センターにおける構音指導

(1) 誤っている音と正しい音の違いを聴覚を通して理解させ、正しい音の聴覚的なイメージをつくることを目的として、聴覚的弁別指導を行う。

(2) 正しい構音操作の獲得と正しい音の習慣化を目的として、構音操作の指導を行う。

2) 幼稚園におけるコミュニケーション支援

(1) 幼稚園における事前アセスメント

幼稚園の教育方針、幼稚園における一日の生活リズム、対象児の遊びの様子、対象児と幼稚園教諭や他児とのコミュニケーションの様子を把握し、支援場面を選定するための基礎資料とした。

(2) 幼稚園のニーズの確認

2007年1月、幼稚園教諭と対象児の支援についての協議を行った。幼稚園における生活に問題はないが、他児との遊びやコミュニケーションの場面において研究者が対象児と他児との仲介役になってほしい、他児を含めた関係形成支援を行ってほしいというニーズが明らかになった。

(3) 幼稚園における支援場面の選定

対象児が獲得すべきであり獲得しやすい行動であること、毎日繰り返される行動であることを基準にして選定した結果、自由遊び場面における幼稚園教諭や研究者にかかわりを求める場面、自由遊び場面における対象児と他児とのかかわりの場面、片付け場面における幼稚園教諭や研究者に対して燃えるごみか燃えないごみをたずねる場面が支援場面としてあげられた。

(4) 幼稚園における支援場面のアセスメント

選定した支援場面においてどのようなかわりが生起しているのか、そのときの幼稚園教諭の支援の様子を把握し、支援計画を立案するための基礎資料とした。自由遊び場面において幼稚園教諭は対象児がかかわりを求めてきても見守るなどの対応しかなされていない場面、片付け場面において対象児が音声言語による発信を行わなくとも対応がなされている場面がみられた。しかし、対象児が幼稚園教諭や他児の遊びの様子に関心を示して見るといった行動をとると、幼稚園教諭が対象児を遊びに誘うといった働きかけが行われていた場面も観察され、その結果、他児の遊びを近くに行ってみる場面、他児に物を差し出したりする場面もみられた。また、対象児と他児との間で音声言語によるかわりの場面はみられなかったが、幼稚園教諭が仲介をすることにより非言語コミュニケーションによるかわりの場面がみられた。

(5) 幼稚園における支援計画の立案

(1) ～ (4) の結果をもとに、対象児と幼稚園教諭や他児とのコミュニケーションを促進するための支援計画を立案した。

①支援目標

- i) 支援目標 1 は「他児の遊びに関心を示す行動（接近、注視など）を増やす」である。
- ii) 支援目標 2 は「幼稚園教諭との直接的なかわりの場面にみられる非言語コミュニケーションを含めた発信を増やす」である。

②支援方針

i) 支援Ⅰ期（2007年1月～2月）

支援Ⅰ期はまず研究者に対する発信を促進させるため、対象児が研究者に動作や音声言語で発信してきた時に INREAL（竹田・里見，2005）の技法を参考にして対応することとし、対象児からの発信に対して受容的に応じるようにする。

また、研究者を仲介にして対象児と他児がかかわる場면을可能な限り設定する。

ii) 支援Ⅱ期（2007年3月～10月）

支援Ⅰ期において対象児が研究者に対して変な歩き方を見せるなどの注意喚起行動や接近がみられるようになっていたため、支援Ⅱ期において

は対象児からの発信が曖昧な場合は研究者が気づかないふりをし、明確な行動で示してきた場合に十分に応じるようにすることによって行動そのものを強化する。さらに、対象児から研究者に対して発信が明確になっていったため、幼稚園教諭に対してもより明確な動作による発信の場面を経験させるため、研究者が対象児と幼稚園教諭の仲介となり、研究者が示したモデルを対象児が幼稚園教諭に対して実行するよう移行する。

また、支援Ⅰ期において対象児が物を差し出しただけで要求を表現してくる場面がみられていたため、支援Ⅱ期においては音声言語が伴っていない場合はすぐに応じず、研究者がモデルを示し、対象児にモデルを実行させるようにする。モデルが実行できた場合は身体接触を多くして十分に褒めるようにする。さらに、研究者が音声言語によるモデルを示さなくとも対象児から研究者に対して音声言語による発信がみられるようになっていったため、幼稚園教諭に対しても音声言語による発信の場面を経験させるため、研究者が対象児と幼稚園教諭の仲介となり、研究者が示したモデルを対象児が幼稚園教諭に対して実行するよう移行する。

支援Ⅱ期においても研究者を仲介にして対象児と他児がかかわる場면을可能な限り設定する。

iii) 支援Ⅲ期（2007年11月～12月）

支援Ⅰ期および支援Ⅱ期においても幼稚園教諭によって対象児に対する働きかけが行われている場面がみられていたが、支援Ⅲ期においては幼稚園教諭に支援目標 1、2 に対する特別な支援を意図的に行ってもらう。

(6) 幼稚園教諭への支援方法の伝達

2007年10月、支援Ⅰ期および支援Ⅱ期の研究者による支援方法や幼稚園教諭による働きかけについて資料とビデオ記録を示し、支援Ⅲ期の幼稚園教諭による支援方法について提案した。協議の結果、研究者が提案した内容は無理なく実行できると判断され、提案した方法で支援を行ってもらうこととなった。

IV 結果

1 構音指導の経過

1) 聴覚的弁別指導の経過

耳の訓練ステップの方法に基づいて進めた。誤り音について正しい音と誤った音の聴覚的弁別は正しく弁別できる状態が安定して続いた。

2) 構音操作の指導の経過

系統的構音指導の方法に基づいて進めた。各段階の小さな到達目標に沿った新たな課題に対して拒む態度を示したり小声になったりし、自信のなさを感じさせることが多く、自信をもたせながら段階を追って慎重に進めた。そのため指導に長期間を要しているが、/pʷ/について単語での固定まで進んだ。

2 幼稚園における支援の経過

1) 支援Ⅰ期（2007年1月～2月）の経過

研究者に対する対象児の発信を促した。研究者が対象児と他児の仲介をすることにより、対象児と他児とのかかわりの場面がみられた。

2) 支援Ⅱ期（2007年3月～10月）の経過

対象児の発信がより明確になっていった。研究者が対象児と幼稚園教諭の仲介となり、研究者が示したモデルを対象児が幼稚園教諭に対して実行するようにし、支援Ⅲ期へと移行していった。

3) 支援Ⅲ期（2007年11月～12月）の経過

(1) 支援目標1 実行の結果

対象児が離れたところから幼稚園教諭を見たり幼稚園教諭の周囲を歩いたりしていた場合、幼稚園教諭から対象児を見たり声をかけたりして対象児の注意喚起行動に応じることにより、対象児と幼稚園教諭、対象児と他児とのかかわりの場面がみられるようになった。

(2) 支援目標2 実行の結果

対象児が動作によって援助を求めた場合、幼稚園教諭が音声言語によって援助を求めることを対象児に促し、音声言語による発信に応じるようにしたことにより、対象児から音声言語による発信がみられるようになった。

V 考察

本研究では幼稚園において適応に困難を示す唇顎口蓋裂児に対する支援として、本大学特別支

援教育実践研究センターにおける構音指導と幼稚園におけるコミュニケーション支援の両面からのアプローチを行った。これまでの構音指導の経過より、今後も継続して構音指導を行っていくことによって会話への般化が予測され、幼稚園における言語コミュニケーションが円滑に行われていくことが期待された。また、幼稚園におけるコミュニケーション支援では、研究者による支援から幼稚園教諭による支援へと移行し、対象児に変容がみられていった。対象児の有している困難を総合的に検討し、専門機関における構音指導だけでなく、対象児の幼稚園においても支援した本研究の方法は意義のあるものと考えられた。

口唇裂口蓋裂は形態的機能的障害だけでなく社会生活上様々な問題が出てくる可能性のある疾患であり（三浦，1995），子どもの発達段階にそって様々な心理的・社会的問題を生じやすいことが報告されており（広瀬，1999；高橋，2003），問題解決のための援助法を提示することのできる具体的な介入研究が必要である（広瀬，1999）と指摘されている。子どもにかかわる様々な職種が連携した支援方法を今後さらに検討していくことが必要である。

文献

藤井和子（1998）我が国における言語障害教育の成立過程について—揺籃期における取り組み—。上越教育大学研究紀要，18（1），131—144。

広瀬たい子（1999）口唇口蓋裂児の心理・社会的問題に関する文献検討。日本口蓋裂学会雑誌，24，348—357。

磯野信策（2001）二段階口蓋形成手術例と言語治療。日本聴能言語士協会講習会実行委員会（編）口蓋裂・構音障害。協同医書出版社，137—155。

三浦真弓（1995）アンケートによる思春期口唇裂口蓋裂患者の心理。日本口蓋裂学会雑誌，20，159—171。

高橋庄二郎（2003）口唇裂・口蓋裂患者の心理社会的研究に関する文献の展望。歯科学報，103（7），598—624。

竹田契一・里見恵子（2005）実践インリアル・アプローチ事例集—豊かなコミュニケーションのために—。日本文化科学社。